2013年
5月17日
金曜日

不確実な時代に生きる精神
（フィリピの信徒への手紙1：21～26）

井口　泰　教授（労働経済学）

安倍政権の経済政策である「アベノミックス」が登場して、日本経済にも明るい気運が生じてきたこと自体、とても好ましいことである。しかし、デフレ脱却を目指す「アベノミックス」については、依然として肯定論と否定論が対立したままである。

日本銀行による金融の量的緩和（第1の矢）は、円高是正の傾向を維持する効果を発揮するとされる。確かに、円高是正で、輸出企業を中心に収益が大幅に改善し、昨年年後半以降、設備投資も回復しつつある。

しかし、これは経済理論が主張した実質金利の低下の結果ではない。住宅投資や国内消費の回復も、「予想インフレ率」上昇の結果ではない。株価上昇の資産効果や、２０１４年４月の消費税引上げ前の駆け込み需要の影響である。円高是正にもかかわらず、貿易収支は、原発の事実上の停止とエネルギー価格の高止まりで、巨額の赤字を続けている。

また、デフレ・ギャップを縮小するために、財政出動を機動的に行う必要がある（第2の矢）。さらに、規制改革などで国内市場を活性化し、ＴＰＰ（環太平洋パートナーシップ協定）やＲＣＥＰ（地域包括的経済連携協定）の締結など、「成長戦略」（第3の矢）が必要になる。しかし、それらが動き出すには相当の時間が必要である。

そこで、金融の量的緩和と機動的な財政出動を続けながら、物価上昇とともに賃金が上昇し、消費需要の拡大を維持できるかどうかが、焦点となっている。こうして、「アベノミックス」の理論と現実は、一層乖離してきたように思われる。

さて、本日読んでいただいたフィリピ人への手紙は、使徒パウロが獄中から書いたものである。彼は、仲間の密告により、投獄されてしまった（1：17）。そうした生きるか死ぬかという恐ろしいリスク負いながら、パウロには、強いスピリットが宿っている。

まず、彼にとっては、生きることも死ぬことも連続している（1：21～22）。同時に、この書簡は、「喜びなさい」ということばで満ちている。つまり、パウロは、死ぬことより、生きることを強く肯定している。その理由は、「実り多い働きができる」からである。

キリスト教は、「一神教」と言われている。しかし、ある意味では異なる。4世紀のニカイア公会議で確認されて以来、それは「三位一体」の信仰である。それを、どう理解したらいいのか。即ち、「裁く神」と「愛する神」が、一見矛盾し対立しつつ、「一人一人の心に生きるスピリット」を通じ、実りをもたらすという強い信仰といえよう。

最近、リーダーシップ養成の方法として、「アサーション・トレーニング」が用いられている。ある意見が主張され、対立する意見が提示される。この対立を固定化せず、別次元の解決策を見出すことで、新たな答を生み出す。これは、「三位一体」の考え方に通じる。

わが国では、議論への参加者が、新たなことを生み出そうという精神に乏しく、対立を固定化する傾向がある。その背景に、知識偏重、形式主義、権威主義がある。

したがって、今こそ必要なのは、「三位一体」の思考法である。ミッション校である本学に必要なのは、形式主義ではなく、不確実な時代に新しいものを生み出そうとする生き生きした精神である。■